

トマス・モア『ユートピア』の新らしい日本語訳

宮 井 敏

トマス・モアの『ユートピア』の新らしい日本語訳が旧蟻中央公論社から中公文庫の一冊として出版された。¹ 沢田昭夫筑波大教授の手になるこの労作は、元来中央公論社『世界の名著』シリーズの第17巻として、エラスムスの『痴愚神札讃』と共に収録されていたもので、今回全面的に手を加えて、「1477年、または1478年に生まれた」トマス・モアの生誕500年を記念する一連の国際的行事の一環として、1978年に改訂版として出されたわけである。

この沢田訳の大きな特徴の一つは、従来の日本語訳のすべてが英訳本からの重訳であったのに対して、綿密なる考證にもとづくラテン語からの直訳であるという点であり、原典に暗い日本のユートピア文学、ユートピア思想の研究者にとって、従来の岩波文庫版では得られない大きな利便を提供する事になるものとおもわれる。

明治以降の『ユートピア』の邦訳は、明治15年の旧徳島藩士井上勤による『良政府談』（のち『新政府組織談』と改題）（東京、思誠堂）（たゞし第2巻のみの抄訳）にはじまり、明治27年荻原絹涯の『理想的国家』（博文館、社会文庫）、大正2年三上正毅『ユートピヤ』（東京、犁牛書院）（詳しい抄訳）、昭和4年守田有秋『ユートピヤ』（平凡社、社会思想全集第1巻）とつづき、以後、村山勇三訳（昭和4年、春秋社、世界大思想全集；昭和8年、同春秋文庫；昭和23年、春秋社）、本多顕彰訳（昭和9年、岩波文庫；昭和25年、三笠書房；昭和36年、河出書房）、平井正穂訳（昭和23年、新月社；昭和26年、

若月書店；昭和32年，岩波文庫² という代表的な三種類の翻訳がひろく用いられて来たのであるが，そのほとんどが Ralph (or Rudolf, Raphe) Robinson (or Robynson) (1521—?) による英訳本（初版1551年）を底本とする重訳であったのである。

このロビンソン訳はマクミラン版³ の編註者 H. B. Cotterill によれば “vigorous, exuberant, picturesque, idiomatic”⁴ な訳文であり，初版に付された，幼な友達であった Queen Elizabeth の寵臣 William Cecil, Lord Burghley に捧げられた献辞⁵ からもうかがえるように，まことに堂々たる，修辞に富んだ Elizabeth 王朝式の文体なのであるが，反面些か冗長饒舌のそしりを免かれぬ。一例を上げれば，“capacia”⁶ というたゞ一語のラテン語が，“so big, so wide, so ample and so large”⁷ となり（イエール版では “so roomy”⁸ とあるのみ），また，“auguria”⁹ という語は “soothsayings and divinations of things to come by the flight or voices of birds”¹⁰ と訳される（イエール版では単に “auguries”¹¹）のである。

こうした筆のはしりの他にあきらかな誤訳も少なくない。第2巻の第1章では馬は少なく，乗馬や武術の訓練以外には用いないとあるのに (“They bring up very few horses... and that for none other use or purpose but only to exercise their youth in riding and feats of arms.”¹²)，第6章では “They have a waggon given them.”¹³ とあって，国内旅行に際しては許可が下りれば馬車一台が与えられることになってしまうのである。（イエール版ではこの箇所は “vehiculum” 単に「乗り物」とあるのみである。¹⁴）また成人男子を意味する “puberes”¹⁵ が “children of the age of fourteen years or thereabout”¹⁶ と訳されたり，“facile defunctum”¹⁷ (“an easy death”) の “facile” が全く脱落していたりする¹⁸ のである。ロビンソン訳の英文とラテン語の原文とを比較対照させて編集した J. H. Lupton¹⁹ はこのような誤訳，脱落が百ヶ所以上にもものぼると指摘しているから，これを底本として来た従来の日本語訳は，さまざまな工夫にもかゝわ

らず（例えば意味不明の箇所はラテン文を随時参照した平井訳など）、原典の意味を正確に把握するという点では大いに問題があったわけである。

かって指摘した事であるが、第2巻の冒頭で征服者ユートパス王が昔はアブラクサ島と云われたユートピアを、「海岸からずっと奥まった内陸の土地を十五マイルほどの幅にわたって開さくし、海をもって一面にこの島をとりかこむ」(岩波文庫、平井訳、71ページ)ことにしたという箇所がある。そもそもユートピア社会というものは、作者がどのように自由奔放に、一切の制約からはなれて、白紙に理想像を描いて見せようとも、その像は描く人の既往の経験と現在の状況を色濃く反映せざるを得ないものであり、その故にユートピア社会にはそれが生み出された時間的空間的現実との継続と断絶という相反する二つの側面があり、その事が、もとは大陸につながっていたが今は切りはなされて島になったというユートピア島のありさまにのみじくも示されている、とのべたのである。²⁰ だとすれば “King Utopus, caused fifteen miles space of uplandish ground, where the sea had no passage, to be cut and digged up, and so brought the sea round about the land.”²¹ というロビンソン訳をふまえた上記の平井訳では、あたかも運河にかこまれたありきたりの海岸沿いの都市というイメージしか浮かんで来ず、既往の現実との断絶という側面がはなはだ希薄にしか感じられない。極端に云えば、この理想社会は従来の社会と大して変りばえのしないものだ、ということになりかねないのである。筆者モアはこの箇所の外にも、原典の扉絵にある假空のユートピア文字で書かれた戯詩の中で “Vtopus me dux ex non insula fecit insulam.” (ユートピア語のラテン訳、英語訳では “Utopus, my ruler, converted me, formerly not an island, into an island.” の意味)としてこの事を重ねて強調しているから、²² 象徴的にきわめて重要な意味をもつこの箇所はやはりラテン語からの直訳である「大陸とつながっていた半島部分の土地を十五マイル掘り起させ、海が島を囲むようにさせたのです」(中公文庫、沢田訳、105ページ)としなければ切角の象徴が意味をも

たないことになってしまうのである。

(イェール版ではこの箇所は "He then ordered the excavation of fifteen miles on the side where the land was connected with the continent and caused the sea to flow around the land."²³ であり、H. V. S. Ogden では "he cut a channel fifteen miles long where their land joined the continent and thus brought the sea entirely around their land." とある。)

こんなわけで、沢田訳は日本のユートピア文学、ユートピア思想の研究に大きなプラスになるであろうし、『ユートピア』翻訳史上画期的な新訳になるとおもわれるのであるが、一つにはそれが綿密な考證にもとづく詳しい註釈に支えられていることを見逃してはなるまい。一例をあげておこう。『ユートピア』全篇のなかで社会学者にとって一番よく知られた箇所は例の「羊が人間をとってくらう云々」という、十六世紀イギリスにおける「囲い込み」による農民からの土地収奪を象徴的に語った箇所であろう。マルクスも『資本論』第1巻、第7篇、第24章「いわゆる本源的蓄積」、第2節「農村住民からの土地を収奪」のなかで、エンクロージャーの例としてこの箇所にふれている。²⁴ こゝは邦訳の上では、平井訳、²⁵ 沢田訳²⁶とも大差ないので翻訳上の問題はないのであるが、後者の方にはくわしい註がついており、そこでは「たゞしモアのこの叙述は修辭的目的のために誇張されている」と指摘され、「囲い込みは区画整理、農業合理化のためにも行なわれ、牧羊のためとは限らなかった」し、そのために「長期的、全国的な食糧危機が生じたあとも見られなかった」とされている。²⁷ 最近の研究ではマルクスの「いわゆる本源的蓄積」に関する議論の史料的、論理的欠陥が指摘され、「エンクロージャー」もまた、農民の犠牲においてではなく、その協力によって行なわれたとする意見もあるようであるが、²⁸ 問題は向坂逸郎訳の岩波文庫『資本論』のこの箇所が訳者註として、「『ユートピア』ロビンソン訳、アーバー版、ロンドン、1869年、41ページ、(平井正穂訳、岩波文庫版、26ページ)」とするにとどまっ

ている点であろう。『ユートピア』が道徳哲学的意図をもって書かれた文学作品である以上、誇張されたモアの文学的表現をそのまま、歴史資料として取扱うことは大きな誤りを犯すことになるだろうからである。

さて、今回稿を新たにして中公文庫の一冊として出版された沢田訳は『世界の名著』シリーズ収録の旧稿に対して、故山口精二上智大助教授の書評を吸収して改訳されたもので、この事自体隠れたる学界の佳話と云えよう。山口助教授の遺稿は「『ユートピア』の翻訳——翻訳のさまざまな困難——」と題して上智大英文科機関誌『英文学と英語学』第6号（1969）に発表されたもので、村山、本多、平井訳との対比において旧沢田訳を綿密に検討し、あわせて翻訳論に及んだもので、単なる揚げ足取りの多い翻訳評の域を脱して建設的批評を試みたことが、今回訳者のとり上げるところとなり、その遺志が新訳の上に一部なりとも生かされたということは今後の翻訳評のあり方を示唆するものとして極めて興味深いものがある。昨年は前述の如くトマス・モア生誕五百年という事もあって、日本においても、田村秀夫編『トマス・モア研究』（御茶の水書房）、沢田・田村・ミルワード編『トマス・モアとその時代』（研究社出版）、塚田富治著『トマス・モアの政治思想』（木鐸社）等かなり大部の研究書の出版があいついだ。今回の沢田改訂訳を第一の基礎資料として『ユートピア』研究、トマス・モア研究、ユートピア文学、ユートピア思想研究が今後大幅に前進することを祈ってやまない。

註

- 1 沢田昭夫訳『ユートピア』、中央公論社、中公文庫、No.280、昭和53年
- 2 cf. 伊達功「日本におけるモア研究」、(社会思想史学会年報『社会思想史研究』、1977、創刊号、ミネルヴァ書房)
- 3 *The Utopia of Sir Thomas More*, tr. by Ralph Robinson, with Introduction & Notes by H. B. Cotterill, (London: Macmillan, 1908)

- 4 *ibid.*, p. 153
- 5 *ibid.*, p. 1 & ff.
- 6 *The Complete Works of St. Thomas More*, ed. by Edward Surtz & J. H. Hexter (New Haven : Yale Univ. Press, 1965), Vol. 4
Utopia, p. 14, l. 1
- 7 Robinson, *op. cit.*, p. 83, l. 2 & 3
- 8 The Yale *Utopia*, *op. cit.*, p. 141, l. 1
- 9 *ibid.*, p. 224, l. 13
- 10 Robinson, *op. cit.*, p. 134, l. 1 & 2
- 11 The Yale *Utopia op. cit.*, p. 225, l. 18
- 12 Robinson, *op. cit.*, p. 68, l. 18 & ff
- 13 *ibid.*, p. 86, l. 16 & ff
- 14 The Yale *Utopia op. cit.*, p. 146, l. 1
- 15 *ibid.*, p. 134, l. 33
- 16 Robinson, *op. cit.*, l. 80, l. 22
- 17 The Yale *Utopia, op. cit.*, p. 236, l. 24
- 18 Robinson, *op. cit.*, p. 141, l. 35
- 19 *The Utopia of Sir Thomas More* in Latin from the Edition of March 1518, and in English from the First Edition of Ralph Robynson's Translation in 1551, With Additional Translations, Introduction and Notes by J. H. Lupton, B. D. (Oxford : The Clarendon Press, 1895)
- 20 拙論「*News from Nowhere* の成立過程」, 同志社大学英語英文学研究14号
- 21 Robinson *op. cit.* p. 66 & ff
- 22 The Yale *Utopia, op. cit.*, p. 18 & f
- 23 *ibid.*, p. 113. l. 8 & f
- 24 マルクス『資本論』向坂逸郎訳、岩波文庫、その三、349ページ

25 平井訳, 前掲書 26ページ

26 沢田訳, 前掲書 64ページ

27 同上書, 228ページ

28 ルネサンス双書『ユートピア』——歴史, 文学, 社会思想, ——(東京; 荒竹出版, 昭51), 81ページ

ちなみに平井訳(8ページ)での「カスバート・タンストール」(Cuthbert Tunstall)が沢田訳で(47ページ)「カスバート・タンスタル」とされているのは卓見である(cf. *Lippincott's Pronouncing Gazetteer of the World*)が, 同上書74ページの「グッド・パーリアメント」はいたゞけない。